

平成 5年 2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

## 埋められた神社の格づけ

神社の参道入口に立つ神社名を彫った石柱の最上部に、「郷社」とか「村社」という字がモルタルで埋められているのを見たことがあると思います。たとえば根ヶ布の虎柏神社では「郷社」という文字が、また長淵の天祖神社や千ヶ瀬の千ヶ瀬神社では「村社」という文字が埋められています。これはどうしたことなのでしょう。

この「郷社」とか「村社」というのは、かつて神社が国家の統制の下に置かれていた時代の神社の格づけ（社格）に関わるものなのです。

明治維新後、日本は神道を国の宗教として保護するとともに、すべての神社を国の統制下におきました。そこで全国の神社をその由緒などをもとに格づけしたのです。

まず官社と諸社に二大別し、さらに官社を官幣社にわけ、それぞれを大・中・小の三等にわけました。また伊勢神宮は社格外の特別な神社としての位置づけがなされ、楠木正成、徳川家康のような忠臣や功臣を祭神とする神社は別格官幣社とされてきました。

諸社は、府県社、郷社、村社、そして無格社に格づけされました。

さて、そこで青梅市内の神社を見てみると、官幣社と国幣社はなく、武蔵御嶽神社が府社に、沢井惣岳山の青渭神社、青梅の住吉神社、それに先に書いた根ヶ布の虎柏神社の3社が郷社に格づけされ、また天祖神社や千ヶ瀬神社をはじめ、36社が村社となりました。

しかし戦後、神道が国家から解放されたことにより、この社格も廃止となり、その結果各神社はその社格を示す文字をモルタルで埋めたというわけです。

ちなみに、社格というのは明治時代になってはじめてできたものではなく、古く律令制度の時代までさかのぼれます。その当時の社格制度の概要をわたしたちは、10世紀につくられた「延喜式」神名帳によって知ることができます。そこには2861の神社名が記載されていて、これらの神社は全国にある多数の神社の中かなんらかの理由にもとづいて毎年2月、祈年祭（としごいのまつり）に国より奉幣を受け、官社とよばれ一般の神社の上に格づけされたのです。また、これらは式に載る神社という意味で『式内社』ともよばれています。青梅市内では、武蔵御嶽神社と青渭神社と虎柏神社が『式内社』といわれています。

また、地域によっては『一宮』とか『二宮』と呼ばれる神社がありますが、これは平安時代中頃以降、国司という地方の役人が巡拝する際の順序をしめしたもので、一種の社格といえるでしょう。また『惣社』というのは、国司の巡拝の繁をはぶくために、その地方の国司が巡拝すべき神社を、国府に近い一箇所に合わせ祀った神社のことをいいます。

(文責 野村慎三郎)